

令和 7 年度 文学部 歴史学科 学校推薦型選抜 総合問題

○解答例・出題意図

1

(1) 解答例

11 世紀から 12 世紀にかけて、ヨーロッパ北部が徐々に穏やかになるにつれて、アントワープの重要性は幾分か高まった。町の大聖堂は、最古の部分が 1352 年に遡るが、その壮麗さは、ブルージュとゲントがヨーロッパ大陸の貿易を支配していた全盛期に、この町が富と人口を増加させていったことを十分に示している。しかし、15 世紀から 16 世紀初頭にかけて、ブルージュが衰退し始めると（一部は政治的な原因によるものだが、むしろ航海術と交易路の変化によるところがより大きい）、アントワープは突然、低地地方のなかで、そしておそらくはヨーロッパのなかで、一位の座に躍り出た。その大きくて深く開かれた港が、ゲント、ブルージュ、ブリュッセルの浅くて狭い運河や川よりも、新しい時代のなかで増加する船舶により適応していたのである。

(2) 解答例

14 世紀半ばに建国された明は、私貿易を禁止し、代わりに冊封体制に基づく朝貢貿易を推進した。15 世紀前半の永楽帝の時代に最盛期を迎え、東アジアでは琉球や朝鮮を中心とする朝貢貿易が盛んとなり、日本も義満期に勘合貿易が開始された。

15 世紀後半になると次第に朝貢による貿易は少なくなる。ただし、東アジアの貿易それ自体は、非公式な密貿易などを通じて引き続き盛んに行われた。こうした背景には、明による海禁政策の弛緩による「互市」の増加や、明以外の国の内政の変化（たとえば、日本における応仁の乱以後の内政混乱）などがあった。

※なお、ヨーロッパの海を通じた東アジアへの進出は、ポルトガルのマラッカ占領支配（1511 年）とその後の明との交易開始（1522 年）など、16 世紀初頭以降となる。

(出題意図)

英語資料で示された歴史の流れについて読解する力、および英語資料に表現された内容と既存の学習知識や基礎知識をふまえて、ヨーロッパとアジアにおける歴史の共時性について適切に理解することのできる思考力を問うた。

2

(1) 解答例

「ペルシア戦争」は、一般的にギリシアの視点から見られているため、広く知られているゆえに、特別な注意を払う必要がないほど有名である。マラトン、テルモピュライ、サラミスの名前は、イギリス（あるいは英国）の軍事史におけるヘイスティングス、ブレナム、ワーテルローの名前と同様に、それ相応に有名である。実際、古典教育を受けたヴィクトリア朝の政治哲学者であり活動家でもあったジョ

ン・スチュアート・ミルはかつて、イングランド史の出来事としてさえ、マラ톤はヘイスティンクスよりも重要である！と主張するに至ったことは有名である。

(2) 解答例

ノルマン人がイングランドを征服したノルマン=コンクエスト（その戦場ヘイスティンクス）は、中世以降のイングランドの在り方を決定づけた。しかし、ギリシアに代表される西洋が、ペルシアに代表されるオリエントに勝利したペルシア戦争（その戦場のマラ톤）は、それ以降の西洋の在り方を決定づけたという点で、イングランド史においてさえ、ノルマン=コンクエスト以上に重要であると、ヴィクトリア朝期の思想家であるジョン・スチュアート・ミルは考えていた。

(出題意図)

ペルシア戦争の歴史上における意義は、時代や社会的文脈において、大きく変化してきた。歴史の評価が絶対的なものではなく、たえず置かれている同時代的な文脈に依存していることを、歴史学科の入学希望者が理解できているかどうかを問うた。

※問1、2とも、地名の誤記については、減点対象とはしない。